

どちらかといえば通信系の付加価値商材として注目されてきたVoIPに、コンピューター側から発信された新しい概念が持ち込まれようとしている。インターネットの標準化団体IETFが規格化を進めているプロトコル「SIP」(Session Initiation Protocol)だ。

実装の容易さやWebアプリケーションとの連携といった特徴から、従来にないコミュニケーションの付加価値化も期待されている。何よりの話題は、マイクロソフトの新OS「WindowsXP」がSIPをサポートし、端末側の利用環境が一気に広がったことだ。

電話によって築かれてきた音声通信の世界を、SIPはどのように変えていくのか。パート1で、WindowsXPの登場がもたらす市場へのインパクトを、キャリアのVoIPサービスの変化とともに検証していく。パート2では、ネットワーク機器メーカーのSIPに対する取り組みと今後のネットワークビジネスの変化を追う。パート3では、日本ルーセント・テクノロジーの安田欣只氏にSIPのテクノロジーについて解説していただく。(本誌・伊藤秀樹)

特集

音声ワールドの常識を覆す SIPの正体

XP登場で一気に広がるIP電話環境 既存網からトラフィック大量流出か?

2001年11月16日、日本でマイクロソフト社の新OS「WindowsXP」が発売された。秋葉原をはじめとした各地の電気街では深夜零時からの店頭販売が多く、華やかなイベントも催された。

そして、次世代OSに対するPCメーカーやベンダー、一般ユーザーの期待は大きく、ワールドワイドでリリースからわずか2週間の間に700万本以上のライセンスの販売を実現している。

実は、このWindowsXP登場のインパクトは、コンピューターの世界だけに及ぶものではない。通信ビジネスに携わるものにとっても、その将来を大

きく変貌させるかもしれない可能性を秘めているのだ。

理由は、インターネットの標準化団体IETFが規格化している次世代マルチメディアプロトコル「SIP(Session Initiation Protocol)」を実装した点にある。

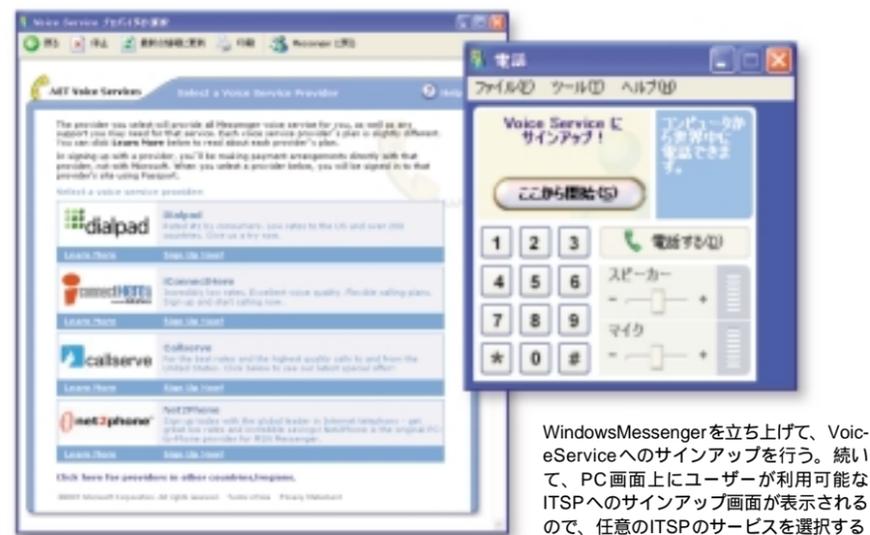
WindowsXPには、音声、ビデオ、アプリケーションシェアリング等、マルチメディアサービスによるリアルタイムコミュニケーションを可能とするソフトフォン+インスタントメッセージング統合アプリケーション「Windows Messenger」が搭載されているが、その通信テクノロジーの核となっ

XML
eXtensible Markup Language:
W3Cによって正式に勧告された、SGMLと同じく文書の構造を記述する言語。ユーザーが独自のタグを定義することができるなど、機能を拡張させ、HTMLの欠点を改善させた。XMLはWeb活用を目的に規格の標準化が進められている

H.323
インターネットやLANを利用したテレビ会議システム等の国際標準規格。ITU-T(国際電気通信連合電気通信標準化部門)で規定。音声と動画、データ通信の送受信方法やシグナリングの方式を規定している

MSN
the Microsoft Network:マイクロソフト社が提供するインターネット接続サービス。ポータルサイトサービスも提供しており、当初は独自のブラウザを用いた会員限定のサービスだったが、現在では一般ユーザーに開放、ニュースや無料メールサービス等が用意されている

WindowsMessengerを使ったIP電話サービス利用のイメージ



ているのがSIPなのである。

これまで、SIPは次世代VoIPサービスを実現するプロトコルとしてメーカー、ベンダー各社から少なからず注目を浴びていた。しかし、今回、企業でも、個人ユーザーにおいても圧倒的なシェアを持つWindowsOSに搭載されたことによって、急速にクローズアップされ始めてきたのだ。

そもそもマイクロソフトが新OSにおいてSIPを採用した狙いはどこにあるのか。

同社では2000年6月、新たなビジネス戦略として「.NET」(ドットネット)を打ち出した。これは、コンピューティングとインターネットを融合することで、次世代のインターネット環境を構築するというものだ。具体的には、インターネットをすべてのインフラとし、XMLを利用することで複数のOSやアプリケーションなどをそれぞれのプラットフォームの形態に関係なく相互に連携させるとともに、接続するデバイスを選ばない形を取りながら、分散環境を構築していくというコンセプトである。

今回のWindowsXPにおけるSIP対応は、その「.NET戦略」を実現するための重要な施策の1つといえる。

インターネットの進化に伴い、その

上で稼働するアプリケーションもWeb、電子メールをはじめ、チャットやインスタントメッセージ、さらには音声とビデオを活用したインターネット電話等、多方面へ拡大している。これらの多様なコミュニケーションサービスを統合することで、ユーザーが求める効率的なコミュニケーションが実現される。もちろん、ベンダー側にとっても新しいビジネスが創造されることになる。

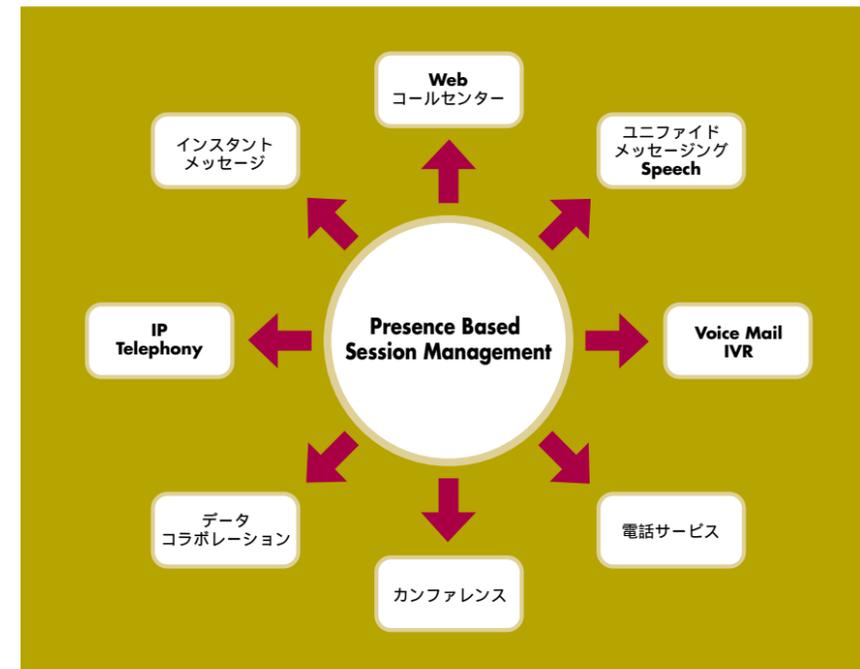
こうした各種インターネットサービスを統合するための主要なプラットフォームとなるものがWindowsXPであり、それを実現するためのテクノロジーとして選択されたのがSIPなのである。

マイクロソフト・コンサルティング本部、プリンシパルコンサルタントの安田貴亮氏は、「私どもが推進する進化したリアルタイムコミュニケーションを実現していくうえで、これまで広く使われてきたプロトコルのH.323では処理負荷の問題などいくつかの解決すべき課題があった。そうした課題を解決するプロトコルがSIPだった」という。

PC同士の通話は無料に

先述した通り、WindowsXPにおいて実現されるマルチメディア通信の中核をなすWindows Messengerは、多様なマルチメディアサービスのリアルタイムコミュニケーションを可能とするツールだ。では、具体的にどのよう

マイクロソフトが目指す新しいコミュニケーションサービス



にしてサービスが実現されるのか。音声通信のケースを例にとってみていこう。

Windows Messengerでは、パソコン同士による音声通信と、パソコンと加入電話間での音声通話を可能としている。

まず、この場合、Windows Messenger用の管理サーバーに事前にユーザープロファイルを登録する。ユーザーは通話を行う際に、Windows Messengerサーバーへアクセス、画面上に表示されたリストを参照し接続したい相手がネットワークに参加していることを確認する。通話したい相手がオンラインの状態であれば、ソフトホンを立ち上げ通話を開始する。その際にユーザーが契約しているプロバイ

特集 音声ワールドの常識を覆す SIPの正体

ダーは問わない。費用も契約プロバイダーに支払っているインターネット接続料のみで、通話料はかからない。

次にこのケースをみていこう。ユーザーはPC側から通常の電話と同じように相手先にコールする。ここではインターネットから、マイクロソフトが提携しているキャリアやISPのIP網へ受け渡され、ゲートウエー装置等を介して一般公衆網へ送り出され、相手先の電話へつなげられる。日本では、イー・アクセスがマイクロソフトとの提携により同形態の通話サービスを展開していくことを表明しており、月額基本料350～400円、3分10円～15円の通話料を予定している。

これまでインターネットを介した「PCtoPhone」型のIP電話サービスは